

(報告書)

酒とタバコからみた蝦夷地の内国化に関する研究

助成研究者 関根達人(弘前大学人文社会科学部・日本考古学)

1. 研究目的

酒とタバコは、米や木綿などの衣類とともに主要な蝦夷地交易品であり、同時にウイマムと呼ばれる朝貢やオムシャ（アイヌに対する慰労行事）の際の下賜物にもなっており、近世和人社とアイヌとの関係性を考える上で非常に重要である。和人は酒とタバコをアイヌ支配の道具として巧みに利用し、アイヌはそれらを自らの儀礼の中に組み込んでいた。また、18世紀以降本格化する和人の漁場進出に関連して内地から多量の酒が蝦夷地に運ばれた。本研究は、北海道内から出土する陶磁器製の酒瓶やキセルなどの考古遺物を通して、和人がいついかなる形で蝦夷地へ進出したか、和人から入手した酒とタバコがアイヌの社会と文化にいかなる影響を与えたか、蝦夷地内国化の過程を探る。

2. 研究方法

本研究は、北海道ならびにサハリン出土の陶磁器データベースやアイヌ墓の副葬品に関するデータベースから酒瓶やキセルを抽出し、それらの時間的・空間的分布状況から、アイヌや北海道に渡った和人の酒やタバコの消費状況を把握することを第1段階とする。第2段階としては、北海道やサハリン各地から数多く出土している越後産の焼酎徳利（松前徳利）について、生産地である新潟市西蒲区松郷屋と阿賀野市笹岡・村岡・山崎地区で窯跡の踏査を行い、窯跡採集資料に基づき型式変遷と窯ごとの製品の特徴を把握したうえで、第1段階の研究で得られた消費地での焼酎徳利の出土状況と照合し、越後産焼酎の生産と流通の実態を解明する。第3段階として、アイヌ絵などの絵画資料や古写真に登場する酒瓶やキセルの検討を行い、第1・2段階で得られた考古学的知見との照合を通して、アイヌ社会における酒とタバコの歴史的意義を考察する。

3. 研究成果・考察

3-1 アイヌ社会におけるタバコの実容と消費

日本へ1570年代頃にポルトガル人によってタバコが伝えられた当初は、供給量も少なく巻いて吸う方式が採られていたが、1590年代頃からはキセルが使われるようになり、キセルの普及とタバコ栽培が急速に広まることとなった¹⁾。江戸時代には紙巻タバコは存在せず、喫煙には専ら金属製のキセルが使われた。金属製のキセルは紙巻きタバコと異なり土

中にあっても完全に朽ちて無くなることはないため、遺跡から出土するキセルを元に喫煙について考察することが可能である。

1643年に道東から千島・サハリンを訪れたオランダ東インド会社所属のカストリカム船隊司令官メルテン・ゲリッツセン・フリースの航海記録²⁾から、1640年代には既にアイヌの間に喫煙が定着していた様子が窺える。

6月10日 オランダ人に**煙草**を求め、**酒と煙草**でもてなされた【十勝川河口】

6月13日 オットセイの毛皮数枚・一枚の熊皮一枚と**煙草**を交換【歯舞諸島勇留島】

7月4日 **テルナーテ産の煙草**を喜んで受け取る【国後島北東海岸】

7月16日 **日本製の銅製キセル**で**ジャワ産の煙草**を振舞う【サハリン島アニワ湾】

7月27日 樺太アイヌに贈った**煙草**が喜ばれた【サハリン島北知床半島】

8月29日 停泊中の松前藩の貨物運送船にはアイヌに対する交易品として**米・衣服・酒・煙草**が積まれている【アッケシ（厚岸）】

テルナーテとはインドネシア共和国モルッカ諸島北部に位置するテルナーテ島を指す。大航海時代にはこの島で産出される高価な香辛料を求めヨーロッパ人が進出しており、1643年当時、オランダとスペインの支配下にあった。

一方、フリースに先立ち1618～22年に北海道の地を訪れた最初のヨーロッパ人であるイエズス会神父のジェットニモ・デ・アンジェリウスとディオゴ・カルワーリュの報告³⁾にはアイヌの喫煙に関する記述が全く見られない。これら17世紀前半に蝦夷地を訪れたヨーロッパ人の記録は、アイヌの人々が日本製のキセルを使って喫煙を始めた時期は、1620～40年代であることを示唆している。

道南の太平洋側に位置する森町森川3遺跡で、寛永17年(1640)に降下した駒ヶ岳d火山灰の下から発見された金属製のキセルは、1630年代までに道南のアイヌの人々に喫煙が広まっていたことを示す考古学的な証拠といえる(図1)。森

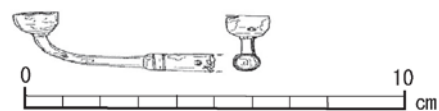


図1 北海道森町森川3遺跡で駒ヶ岳d火山灰の下から出土したキセル(1640年代以前)

(原図出典：文献5)

川3遺跡から出土したキセルの雁首は、大きめの火皿には火皿窓、火皿と脂返しとの接合部分には補強帯がそれぞれ見られ、羅字側に肩が付くもので、古泉弘氏によるキセル編年⁴⁾のI期とII期の過渡的な様相を示す。なお、このキセルに伴う焼土の年代測定値は1600±30年と報告されている⁵⁾。

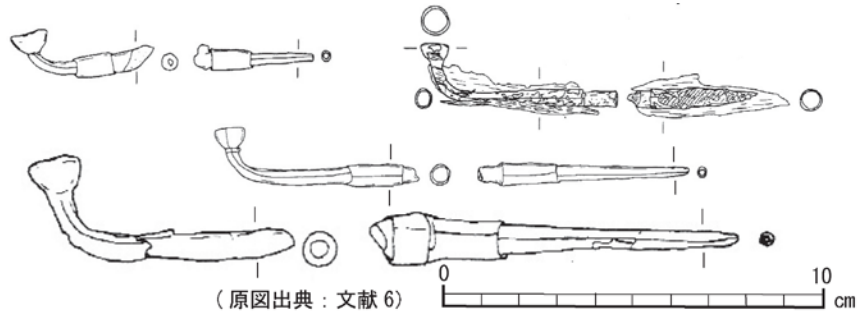
また、道央の太平洋側に位置する伊達市有珠4遺跡では、駒ヶ岳d火山灰より下から検出された10基の墓にはキセルは全く見られないが、駒ヶ岳d火山灰と寛文3年(1663)年に降下した有珠b火山灰の間から検出された墓では10基中4基にキセルが副葬されていた(図2)⁶⁾。キセルが副葬された人は生前に喫煙していたと考えられるが、キセルが副葬されていないからといってタバコを吸わなかったことにはならない。1640～50年代の有珠アイヌの喫煙率は少なくとも40パーセント、実際にはタバコを吸わない人のほうが少なかっ

たと推測される。また、有珠4遺跡の事例は、道央では1630年代までは日本製のキセルが十分供給されておらず、1640～50年代に急速に普及したことを物語っている。

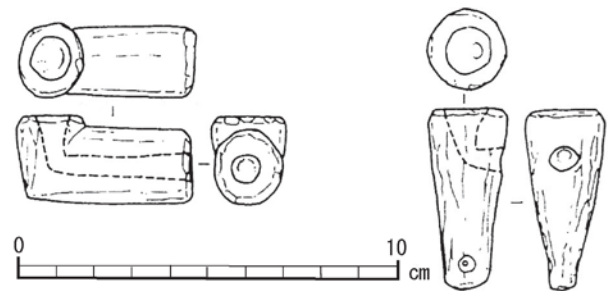
出土資料や民族資料に

よれば、アイヌの人々は喫煙する際、金属製のキセルだけでなく、「スマキセリ」と呼ばれる石製のパイプ（図3）やサビタ（ノリウツギ）で作られた「ニキセリ」と呼ばれる木製のパイプ（図4）も使用していた。金属製のキセルは北方地域に広く分布するのに対して、木製のパイプは北海道内に分布が偏り、石製のパイプは、それより北方の道北・道東からサハリン・沿海州・千島に遍在する⁷⁾。ノリウツギはアジサイ科アジサイ属の落葉低木で、北海道から九州にかけて分布する。ノリウツギは中の白い芯が柔らかく簡単に抜ける上、乾燥すると非常に硬くなるため、格好のパイプの素材となった。金属製のキセルが入手困難な場合、ノリウツギが生えている北海道内では主にノリウツギの枝で作ったニキセリが使われ、ノリウツギが手に入りにくいより寒冷地の道北・道東からサハリン・沿海州・千島では石製のパイプが用いられたと思われる。これらアイヌ自製の喫煙具は、彼らがいかに喫煙に執着していたかを物語っている。

日本製の金属キセルはサハリン島からも発見されている（図5）。分布状況から、サハリン南部に住む樺太アイヌのみならず、サハリン中部以北に住むニブフやウイльтаも喫煙に日本製のキセルを使っていたと見られる⁸⁾。サハリン出土の日本製キセルは、古いものは17世紀後半に遡る。



（原図出典：文献6）
 図2 北海道伊達市有珠4遺跡で駒ヶ岳d火山灰降下以降、有珠b火山灰降下以前のアイヌ墓から出土したキセル（1640～1663年）



（原図出典：礼文島教育委員会『重兵衛沢2遺跡』1986）
 図3 北海道礼文島重兵衛沢2遺跡出土の泥岩製パイプ



（原図出典：宇田川洋『アイヌ考古学研究・序論』、北海道出版企画センター、2001）
 図4 アイヌ民族博物館所蔵のニキセリ

アイヌ墓へキセルが副葬される割合は、17世紀後半以降、東北地方にほぼ匹敵する40パーセント前後の高い比率を示す(図6)⁹⁾。前述の通り、アイヌは金属製のキセルと和人の用いない木製のパイプ(ニキセリ)も併用していたが、後者は土中で腐ってしまうことから、アイヌの喫煙率は和人のそれを上回っていた可能性が高い。

蝦夷地関連の文献史料に記録されたタバコは、大きく地廻タバコ、産地名を明記した本州産のタバコ、山丹交易により北から入ってくる中国北東部産のタバコに分かれる。江戸時代に蝦夷地でもタバコが栽培されていたことを示す史料が散見されることから、地廻タバコには、

史料で確認できた南部産の野辺地縄芥や庄内加茂周辺産といった東北産のものに加えて蝦夷地で栽培されたタバコが含まれていたと思われる¹⁰⁾。産地名が明記された本州産のタバコは、四国産の阿波粉・南部粉・仙北粉

が多く、他に鹿児島産の国分タバコ・豊後粉・加賀粉、仙台タバコ・岐阜粉等がみられる。

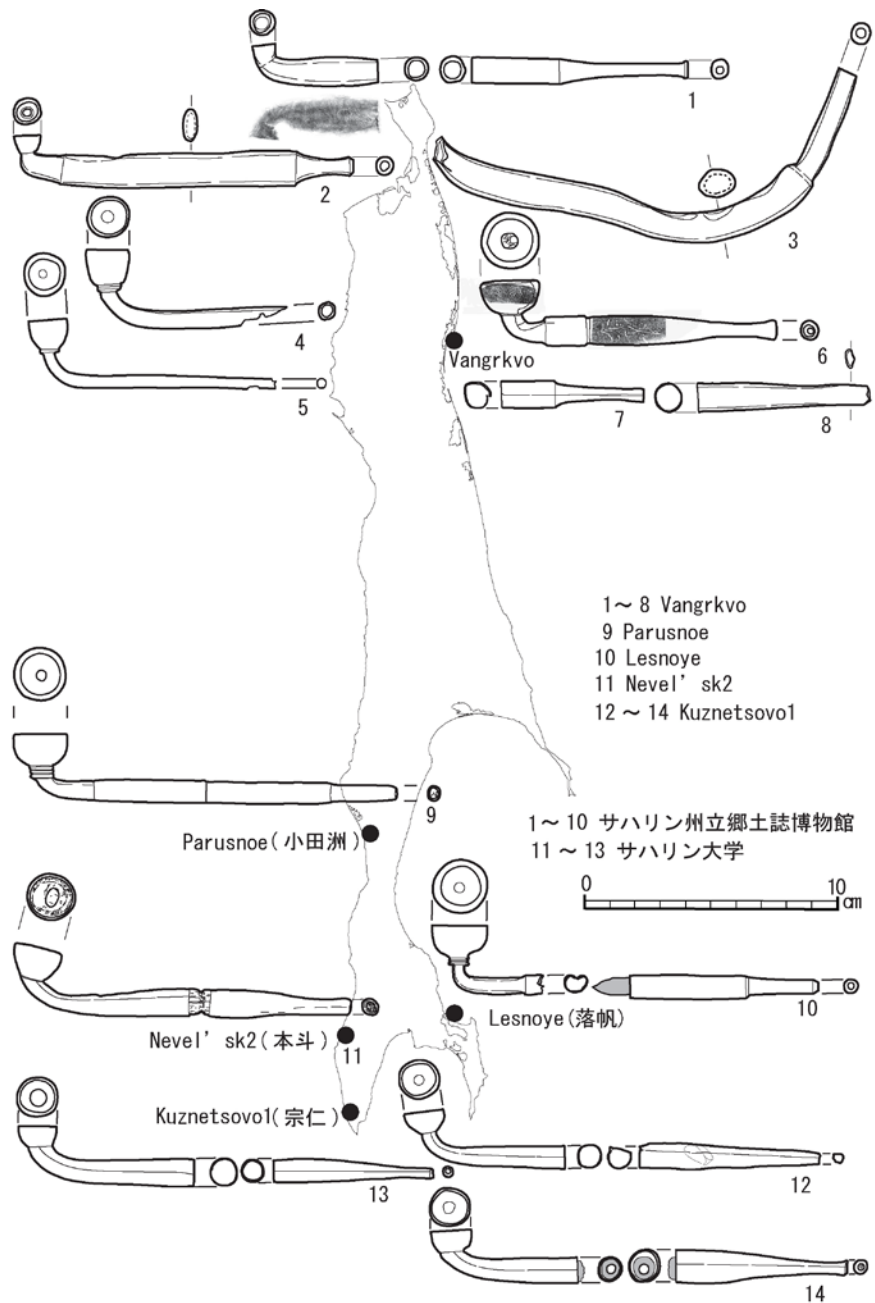


図5 サハリン出土の日本製キセル

(図出典: 文献 8)

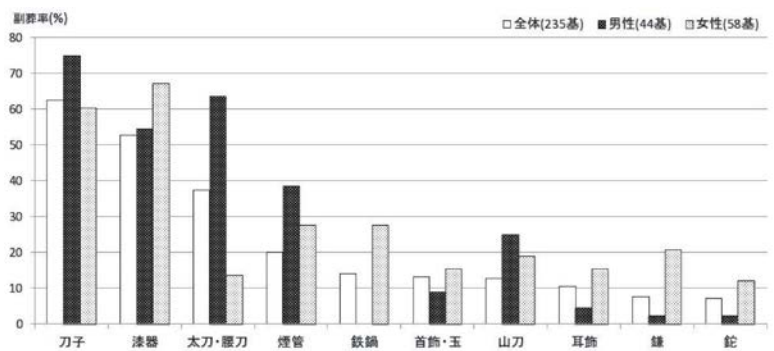


図6 アイヌ墓の副葬品 副葬率の高い上位10品目

(図出典: 文献 9)

南部産のタバコは、南部粉のほかにさらに領内の地域名を冠した大はさま（現岩手県花巻市大迫地区産）・大櫃物（現大槌町大槌地区産）・小櫃物（現大槌町小槌地区産）が確認される。仙北粉は、現在の秋田県大仙市仙北地区で生産されたタバコで、神宮寺の河湊から雄物川を下り、城下町久保田の外港であった土崎湊から蝦夷地に向け移出された。

蝦夷地で流通していたタバコの値段は、阿波粉を基準に、国分産が約 2.4～1.3 倍と最も高価で、仙北産や豊後産は国分産と阿波粉の中間に位置し、南部産や地廻品は約 0.9～0.8 倍前後で、品質が劣るとされていたようである。

キセルもタバコや酒同様、ウイマムやオムシャの際に、アイヌへ下賜された物品や蝦夷地場所での対アイヌ交易品の古記録に多く認められる。加えて山丹交易により中国北東部で作られたキセルももたらされていることも確認される。

最上徳内の『蝦夷草紙 別録』に収められている天明 6 年 (1786) のクナシリ・アツケシ・キイタツフ場所における交易の平均値段が記された「蝦夷地交易直段付帳」では、ラッコ皮は 1 枚あたり上品のものが、米 60 俵 (1 俵は 8 升入りで、1 升につき 68 文 5 歩)・糶 6 俵 (1 俵は 8 升入りで、1 升につき 56 文 5 歩)・酒 2 樽 (5 升入・1 升につき 160 文)・タバコ 2 把 (1 把につき 48 文)・キセル 2 本 (1 本につき 75 文) の合計 37 貫 294 文、中品が米 45 俵・糶 4 俵・酒 2 樽・タバコ 4 把・キセル 2 本の合計 27 貫 816 文、下品が米 30 俵・糶 3 俵・酒 1 樽・タバコ 3 把・キセル 2 本の合計 8 貫 746 文との交換比率が示されている。同様に、熊皮は一枚につき、上品のものがタバコ 2 把とキセル 1 本の計 161 文、中品がタバコ 1 把とキセル 1 本の計 123 文、下品がタバコ 1 把とマキリ 1 丁の計 73 文と定められている¹¹⁾。蝦夷地交易の交換比率を表す際に、米・糶・酒と並ぶ基準品目とされたタバコやキセルは、アイヌの需要が高かったといえよう。

3-2 蝦夷地における酒の消費

① アイヌ社会で消費された酒

アイヌ社会では儀礼用に主に稗を原料とする「トノト」と呼ばれる濁り酒が造られていた。対アイヌ交易品のトップは米だが、米は糶とセットで記載されていることが多いことから、和人から入手した米の多くはアイヌの人々により酒米として利用されたと考えられる。また、ウイマムやオムシャの際にアイヌへ下賜された物品や蝦夷地場所での対アイヌ交易品の古記録では、米や木綿などの衣類とならんで酒やタバコが非常に目立つ¹²⁾。

蝦夷地関連の文献史料に残る酒には、清酒と濁酒があり、清酒は大坂酒と越後酒に加えて、現在の山形県鶴岡市大山地区で製造された大山酒が多く確認される。大山は「東北の灘」と称されるほどの酒の名産地で、蝦夷地には北前船の寄港地である日本海に面した加茂から沖出しされた。余市町入舟遺跡からはアイヌ文様が刻まれた糸巻きとともに「羽州大山 石寺屋」の焼印が押された二斗入と思われる酒樽の底板が出土している (図 7)¹³⁾。

焼印にある石寺屋は、享保年間に酒造業を始め、遅くとも 18 世紀中頃には石寺屋の屋号

を名乗り、幕末まで操業していた老舗の造り酒屋であった¹⁴⁾。入舟遺跡出土の「羽州 大山 石寺屋」の焼印をもつ酒樽は 18 世紀中葉から幕末のもので、石寺屋が醸造した「志ら鷹」が入っていたと思われる¹⁵⁾。

大山酒の恒常的な移出先は主に松前・函館と新潟であった¹⁶⁾。安永 3 年(1774)の売目録によれば、6 月 2 日に加茂より松前に向け 150 樽の大山酒が沖出しされた。150 樽の総額は約百両で、税金や諸経費を差し引いた残額は約 80 両であった¹⁷⁾。一方、東蝦夷地シベツ場所(北海道標津町)の通詞であった加賀伝蔵の仕入物注文帳には、350 樽の越後酒を仕入れたが、搬送中に 150 樽が白く変質してしまい、それをアイヌに払い下げたならかなりの損になることや、350 樽のうち 250 樽は年内販売せず「困酒」として保管するので、秋味(鮭)を運ぶ船で越後酒と大山酒をとり混ぜて送ってほしい旨記されている¹⁸⁾。越後酒が白変したのは、火入れが十分でなかったためと思われる。越後酒より大山酒のほうが良い酒と認識されていたことや、越後酒は大坂酒の 10 分の 1 の価格であったことが分かる。

次にアイヌの飲酒に関する考古資料として、酒器を取り挙げる(図 8)。アイヌの人々が古くは陶磁器を用いず、和産物である漆器を宝物としていたことは広く知られる。彼らが所有する漆器は、杯・椀・天目台・高杯・膳(折敷)・銚子・湯桶・片口・耳盥・角盥・行器・食籠・塗り樽・唐櫃・手箱など多岐に渡るが、その多くは時として本来的な使い方を逸脱し、酒器ないし、酒を醸すための容器(酒槽器)として利用された。酒は本来、アイヌの人々にとって嗜好品ではなく宗教儀礼に不可欠なものであり、彼らが威信財として所有する漆器はそうした酒儀礼の場に不可欠な道具であった。天目台の上ののせた杯の上に横置きされるイクパスイ(捧酒箸)は、アイヌ文化に特有の酒を神に捧げるための道具である(図 8-1)。

余市町大川遺跡迂回路地点 P-41 の方形配石茶毘墓や厚真町オニキシベ 2 遺跡 1 号墓では、鎌倉から出土するような 13 世紀末から 14 世紀代のスタンプ文を有する漆椀が発見されている。

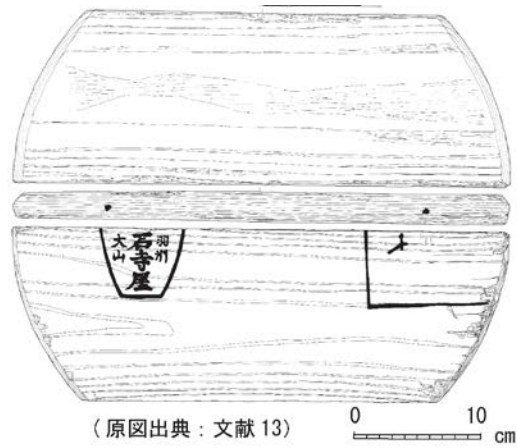


図 7 北海道余市町入舟遺跡出土酒樽底板
(原図出典: 文献 13)



1 上ノ国町勝山館跡宮野沢右岸地区
2 平取町二風谷遺跡 1 号墓
3 厚真町ニタツナイ遺跡 3 号住居跡
4~6 余市町大川遺跡
(図出典: 関根達人「北方史とアイヌ考古学」、
『季刊考古学』133、2015)

図 8 考古資料にみるアイヌの酒器

北海道の出土漆器は、江戸前期には、本州の一般的な近世遺跡に比べ、余市町入舟遺跡の高台寺蒔絵椀をはじめ蒔絵や琉球沈金の技法等の加飾を有する優品や堅牢で実用性に優れた根来系の朱漆器が目立ち、江戸後期から幕末には一般品の範疇に入るものが多いという¹⁹⁾。平取町二風谷遺跡や礼文町香深井5遺跡では、17世紀代のアイヌ墓から折敷とともに盛岡藩領産と思われる南部箔椀が出土している(図8-2)。18世紀以前のアイヌ墓に多く見られる折敷と漆椀のセットは、酒儀礼の際に使われるシネオッチケ(一具の膳)が副葬されたものであろう。

漆椀・耳盥・行器はサハリン島南部からも出土しており、樺太アイヌも18世紀以前から北海道アイヌと同じように日本製の漆器を使った酒儀礼を行っていたと思われる²⁰⁾。

厚真町ニタップナイ遺跡では、1667年降下の樽前b火山灰を掘り込んで構築され、駒ヶ岳c2火山灰が降下する1694年以前に廃絶した3号住居跡の床面から表面に錫を重ねた銅製の銚子が出土している(図8-3)。和人社会では徳利の使用が一般的となる江戸中期以前には正式な宴席ではこのような銚子が使用されていた。銚子は寛政11年(1799)の「蝦夷島奇観」のチセ内部を描いた図でも確認できる。18世紀以前のアイヌは、和人社会の伝統的な高級酒器を自らの酒儀礼に取り入れていた。

蝦夷地の内国化が進む19世紀中葉には、アイヌ社会にも筆者が「幕末蝦夷地3点セット」と名付けた中甕・徳利・膾皿からなる陶磁器類が急速に入り込む²¹⁾。中甕と徳利は本来的には北前船で味噌・塩や酒を運ぶ際の容器であり、肥前系磁器の膾皿は漁場の労働者の食事に相応しい碗と皿の両方の機能を兼ね備えた便利で安価な食器であった。幕末の蝦夷地から出土する徳利には肥前系の笹絵徳利(図8-4)・コンプラ瓶(同6)、「松前徳利」とも呼ばれる越後産の焼酎徳利(同5)が主体となる。

オムシャの際にアイヌが配給される酒は、役職や年齢、功績に応じて種類や分量が細かく決められており、和人が酒をアイヌ支配の道具として巧みに利用していたと考えられる。自ら酒を醸さずとも和人から大量の酒を入手する環境が整うにつれ、アイヌにとって酒は宗教儀礼に係る本来の意味合いが薄れ、嗜好品へと変質したと推察される。アイヌ絵師として知られる平沢屏山の「アイヌ熊送りの図」(図9)が示す通り、幕末にはアイヌも儀礼の場であっても徳利で酒を飲むようになったと考えられる。



図9 熊送りを描いたアイヌ絵に見られる徳利

② 箱館開港・蝦夷地の内国化と越後の焼酎

幕末から大正初期に、越後酒の酒粕を原料として信濃川河口の沼垂周辺で生産された焼酎が、新潟県内で焼かれた徳利に詰められ新潟港から蝦夷地・北海道に向け、大量に移出

された。越後産の焼酎徳利は「幕府、蝦夷地開拓の当時、越後三条の人、松川弁之助、函館奉行堀利瀨の意を受け、安政年間蝦夷に渡りし時、人夫その他の飲料に越後焼酎を松前に持ち込みたるが嚙矢となす」²²⁾とされるように、それらは蝦夷地向けの移出品であることから、生産地の新潟では「松前徳利」と呼ばれた。

越後産焼酎徳利は、口径3～5cm、底径5～9cm、高さ24cm前後、容量7合5勺を標準とする。太めの玉縁ないし突帯を巡らせた口縁を持ち、頸部はやや長めのものと猪首状の短いものがある。全体のプロポーションは、肩が張り丸みを帯びるものや、なで肩のものなどがある。釉薬は、木灰と藁灰を基調としたものがあり、内面や高台内にも施釉が見られる。高台付近の胴部最下部や高台内に押印された窯印から窯元が特定できるものもある。越後産焼酎徳利に関する基本的な研究は、松下亘氏によって行われ、幕末以降、新潟港から北前船によって大量に北海道へ運ばれたことが指摘されている²³⁾。筆者は、これまでに焼酎徳利が北海道を中心として青森県やサハリン島、千島列島の占守島において出土、採集していることを確認した²⁴⁾。

これまでの越後産焼酎徳利に関する研究は伝世品に偏り、出土品の検討は、生産地・消費地ともに不十分であった。また、幕末から近代の遺跡は、近年次第に調査の対象となりつつあるが、資料化されていない遺物も多い。越後産焼酎徳利は、幕末の開港や蝦夷地交易に結びつく資料であり、近代北海道の産業や生活文化に深く関連する資料であると考えられる。本研究では、従来の調査研究に加えて、焼酎徳利の窯跡の分布調査と消費地出土資料の集成を行った結果、越後産焼酎徳利の生産と流通が判明した²⁵⁾。

【越後産焼酎徳利の生産地と製品の特徴】

越後産焼酎徳利の生産窯は、新潟県阿賀野市五頭山西麓と、新潟市の角田山東麓、そして三条市高安寺に分けられそのうち五頭山西麓と角田山東麓の二地域が主要な産地である。

焼酎徳利を生産した窯跡は、五頭山西麓では8ヶ所で、山崎焼・笹岡焼・出湯焼・村岡焼が該当する。五頭山西麓地域全体の操業終末年代はおおよそ明治末期で、大正以降は旧安田町（現阿賀野市保田）に移動し、そこで瓦生産に移行している。角田山東麓では13ヶ所で、松郷屋焼・平沢焼・稲島焼・岩室焼・夏井焼が該当する。越後産焼酎徳利は、この地域の松郷屋焼阿部窯で万延元年(1860)に阿部勘九郎により作られたことが始まりとされる²⁶⁾。松郷屋焼は昭和20年代まで生産されており、焼酎徳利の生産が終了した後は播鉢や鍋、瓦、硫酸甕、土管等の生産へと移行している。

五頭山西麓で焼かれた焼酎徳利は、明灰色～黄味がかった灰色の胎土を持つ。口縁の形状は肥厚した幅広の突帯で、突帯の幅は1.8cmを超えるものが多い。頸部は短いものが多く、胴部が長いプロポーションを有するものが主体を成す。内面、外面、高台内ともに灰釉が施されており、稀に鉄釉が施されている製品もある。

角田山東麓で焼かれた焼酎徳利は、灰色～濃い灰色の胎土を持つ。口縁の形状は、玉縁あるいは幅広の突帯で、突帯幅は1.8cmを下回るものが多い。釉薬は鉄釉をベースとして

内外面と高台内に施釉しており、外面はその上から藁灰釉を胴部下部まで塗布している。口縁から頸部の内面には、外面の藁灰釉が垂れるものが多い。高台内釉は、鉄釉と藁灰釉の両方が見られる。

成形方法は、五頭山西麓・角田山東麓ともロクロ成形であり、底部からロクロで一気に引き上げて作られている。

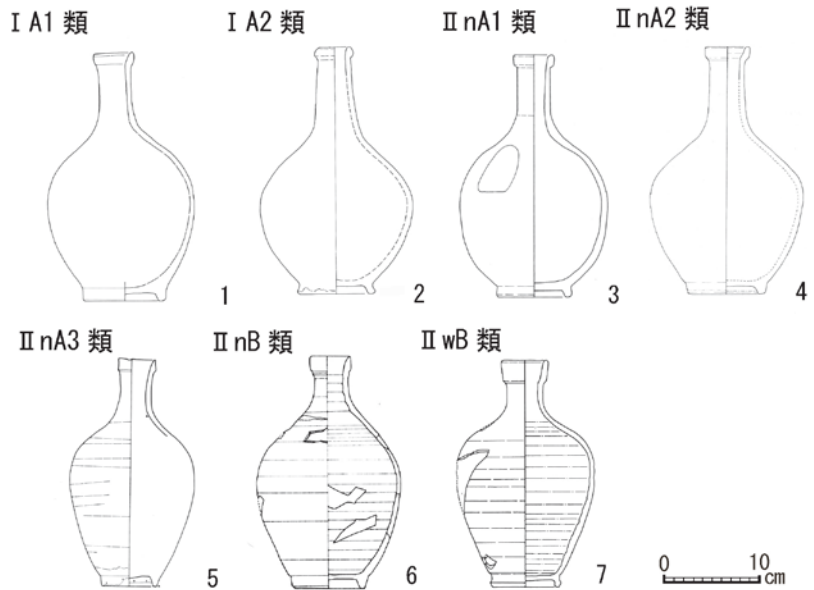
【越後産焼酎徳利の分類と編年】

焼酎徳利の形態を、口縁部形状と全体のプロポーションによって分類した（図 10）。口縁部は玉縁状のもの（I 類）と突帯が巡るもの（II 類）に大別し、突帯が巡るものについては、幅が 1.8cm 未満（n 類）と 1.8cm 以上（w 類）に細分した。全体のプロポーションは、頸部が長いもの（A 類）と短いもの（B 類）とで大別し、頸部が長いものについては、肩が張り、胴部が丸みを帯びるものを 1 類、なで肩で胴部が短いものを 2 類、なで肩で長胴のものを 3 類とした。これらの分類を組み合わせた結果、IA1 類・IA2 類・II nA1 類・II nA2 類・II nA3 類・II nB 類・II wB 類の 7 種に分けられた。

以上の分類に基づき、焼酎徳利の型式変化と年代の限定できる資料を照合し、早期・前期・中期・後期の 4 時期からなる編年案を作成した（図 11）。

早期は IA1・IA2 類、前期は II nA1・II nA2 類、中期は II nA3 類、後期は II nB・II wB 類

類が該当する。早期・前期の形状は、玉縁あるいは突帯幅の狭い口縁で、鶴首状の頸部を持つ。全体のプロポーションは丸みを帯びるか、もしくは肩が張るもので、胴部は短い。この形状は、幕末に広く日本海沿岸域に流通していた、笹絵徳利や陶製のすず徳利など肥前系諸窯の徳利と類似しており、それらをモデルとした可能性が高い。中期になると次第に頸部が短くなり、長胴形を呈するようになる。後期は口縁突帯部分が肥厚し、頸部が猪首状となる。また、中期以降は胴部下半が高台に向けてすぼまる。こうした形態変化は、焼酎徳利の輸送環



【分類基準】
 口縁の形状
 I 類：玉縁
 II 類：突帯
 n 類：突帯幅が 1.8cm 未満
 w 類：突帯幅が 1.8cm 以上
 全体の形状
 A 類：頸が長い
 1 類：肩が張り、胴部が丸みを帯びるもの
 2 類：なで肩で胴部が短いもの
 3 類：なで肩で長胴のもの
 B 類：頸が短い

- 1 函館市五稜郭跡
（『五稜郭跡・箱館奉行所跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会編 1990）
- 2 北斗市松前藩戸切地陣屋跡
（『史跡松前藩戸切地陣屋跡』
北海道埋蔵文化財センター編 1984）
- 3 厚沢部町館城跡
（『史跡松前氏城跡福山城跡館城跡跡 V』
厚沢部町教育委員会編 2009）
- 4 白老町白老仙台藩陣屋跡
（『史跡白老仙台藩陣屋跡 I』白老町教育委員会編 1982）
- 5 上ノ国町上ノ国漁港遺跡
（『上ノ国漁港遺跡』上ノ国町教育委員会編 1987）
- 6 斜里町オンネベツ川西側台地遺跡
（『オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』
斜里町教育委員会編 1993）
- 7 松前町福山城跡
（『史跡福山城 II』松前町教育委員会編 1985）

図 10 越後産焼酎徳利の分類
 （図出典：文献 25）

境と大量生産に起因すると考えられる。焼酎徳利を輸送する際は、口に木栓を詰めた後、水で溶かした石灰を塗布し、口縁から頸部を箭の皮で覆い、木綿糸で括ったという。焼酎徳利は、中身の焼酎が商品であり、徳利そのものは本来的にはコンテナに過ぎない。船での輸送に合わせ、口縁部は木栓をしても壊れにくいよう、玉縁から肥厚した突帯へと変化し、窯や船内に徳利と徳利をできるだけ隙間なく詰められるように、球胴形から長胴形へと変化したのであろう。最盛期の明治中期には、旧笹神村で年間 150 万本²⁷⁾、松郷屋で年間 20~30 万本²⁸⁾の焼酎徳利生産が生産されたと言われる。このような大量生産を実現するため、ロクロで

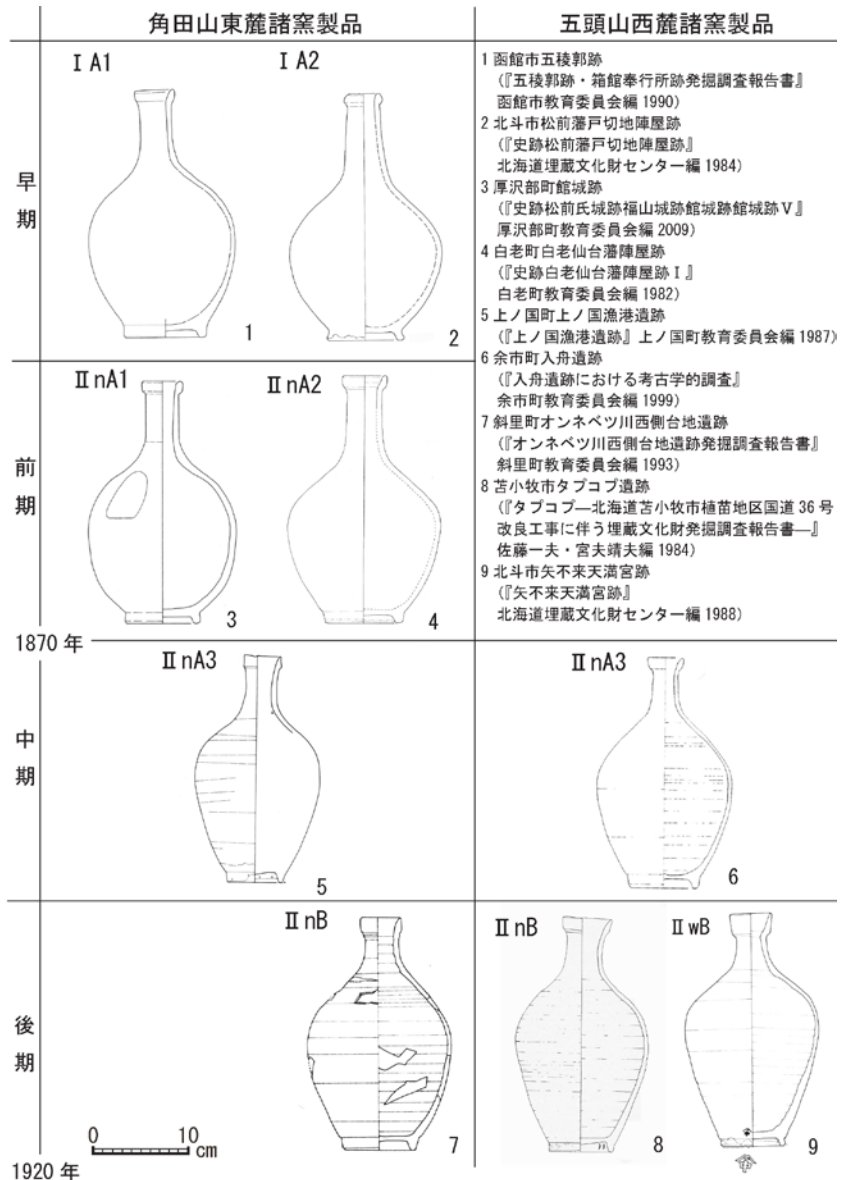


図 11 越後産焼酎徳利の編年

(図出典：文献 25)

底部から口縁部までを一気に引き上げるように形態が変化していったものと考えられる。

次に編年案に実年代を与えるため、消費地遺跡から出土した年代が限定できる資料について検討した。幕末から明治初期に時期の限定できる遺跡は、北斗市松前藩戸切地陣屋跡、厚沢部町館城跡、苫小牧市弁天貝塚、苫小牧市開拓使美々鹿肉缶詰製造所跡、白老町白老仙台藩陣屋跡の 5 遺跡である。このうち戸切地陣屋跡・館城跡・白老仙台藩陣屋跡からは、早期・前期の徳利が出土している。したがって早期・前期と中期・後期の境目は 1870 年頃と考えられる。焼酎徳利生産の終末は、北海道での馬鈴薯による焼酎生産開始や、ガラス瓶の普及等により、大正 9・10 年(1920・21)年頃と考えられる。

以上、生産地での調査と編年から、焼酎徳利の生産は角田山東麓で開始され、五頭山西麓ではそれより遅れて 1870 年代に始まることが明らかとなった。中期・後期の製品にみられる窯印は、生産業者の急増を受けて、窯元が製品を区別しやすくするために始まった

と考えられる。角田山東麓の松郷屋では早期から後期まで全時期を通して焼酎徳利が作られている。一方で、松郷屋では、播鉢や植木鉢など焼酎徳利以外の在地向け製品も幅広く生産することで、焼酎徳利の生産が終了した後も窯業を継続できたと推定した。新規参入した五頭山麓の窯は焼酎徳利の生産に特化しており、焼酎徳利の需要がなくなるとともに廃窯した。

【越後産焼酎徳利の流通】

越後産焼酎徳利は、前述の通り主に北海道向けに移出された製品だが、青森県やサハリン島、千島列島の占守島でも出土や採集事例が確認されており、その出土・採集地は計 105ヶ所にのぼる（図 12）。分類と編年案に基づき、焼酎徳利の流通について検討するため、消費地の出土・採集資料の分布図を時期別に作成した（図 13）。対象とした遺跡や採集地は、早期 31ヶ所、前期・中期 35ヶ所、後期 18ヶ所である。

報告事例の少ない北海道北部や道東の一部を除き、分布に大きな地域差は見られず、どの時期も同様に焼酎徳利の需要があり、流通していたものと推察できる。生産地域について時期別に着目すると、早期には五頭山西麓ではまだ焼酎徳利の生産が始まっていないため、角田山東麓で焼かれたものだけが流通する。前期・中期になると五頭山西麓の製品が流通し始め、後期には角田山東麓の製品に代わって主流となる。北海道内では、角田山東麓の製品と五頭山西麓の製品の分布に偏りは認められない。徳利はあくまでコンテナに過ぎず、消費地で産地が意識されることはなかったと考えられる。

一方、サハリン島では後

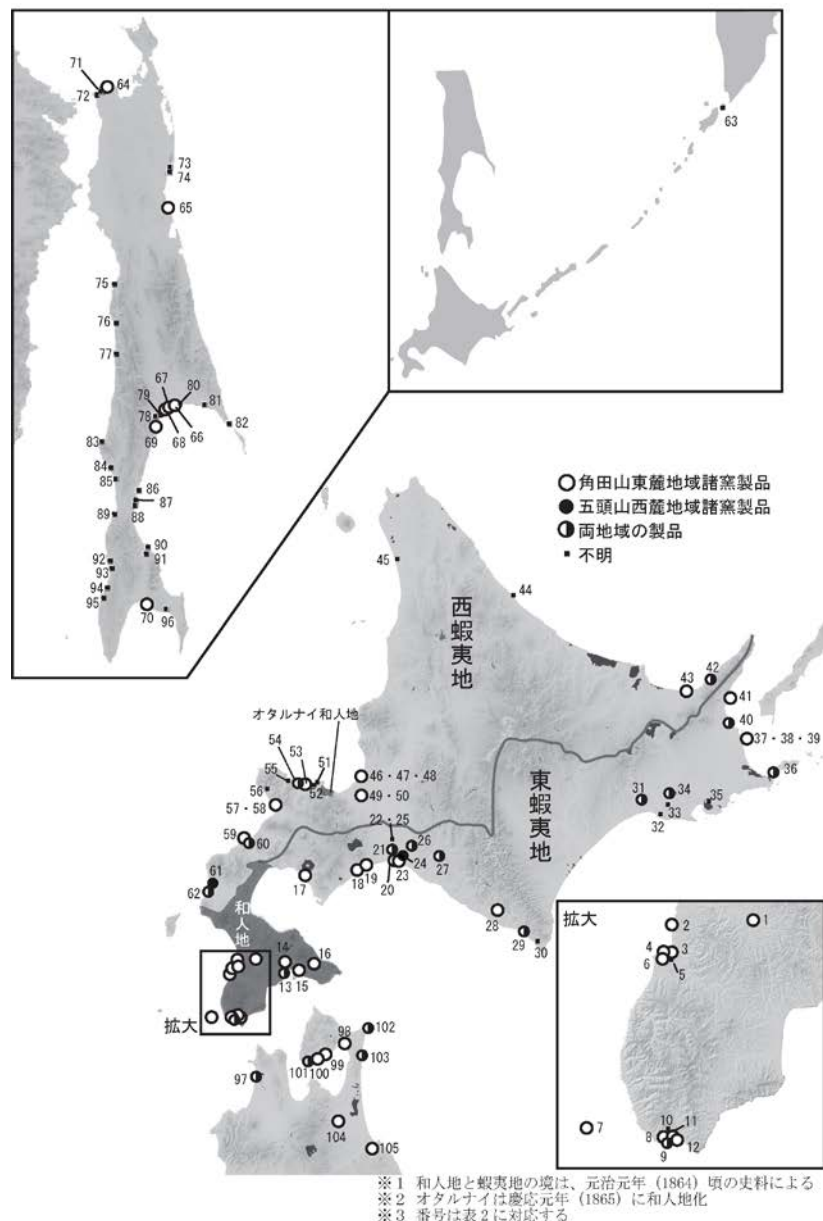


図 12 越後産焼酎徳利出土・採集地（図出典：文献 25）

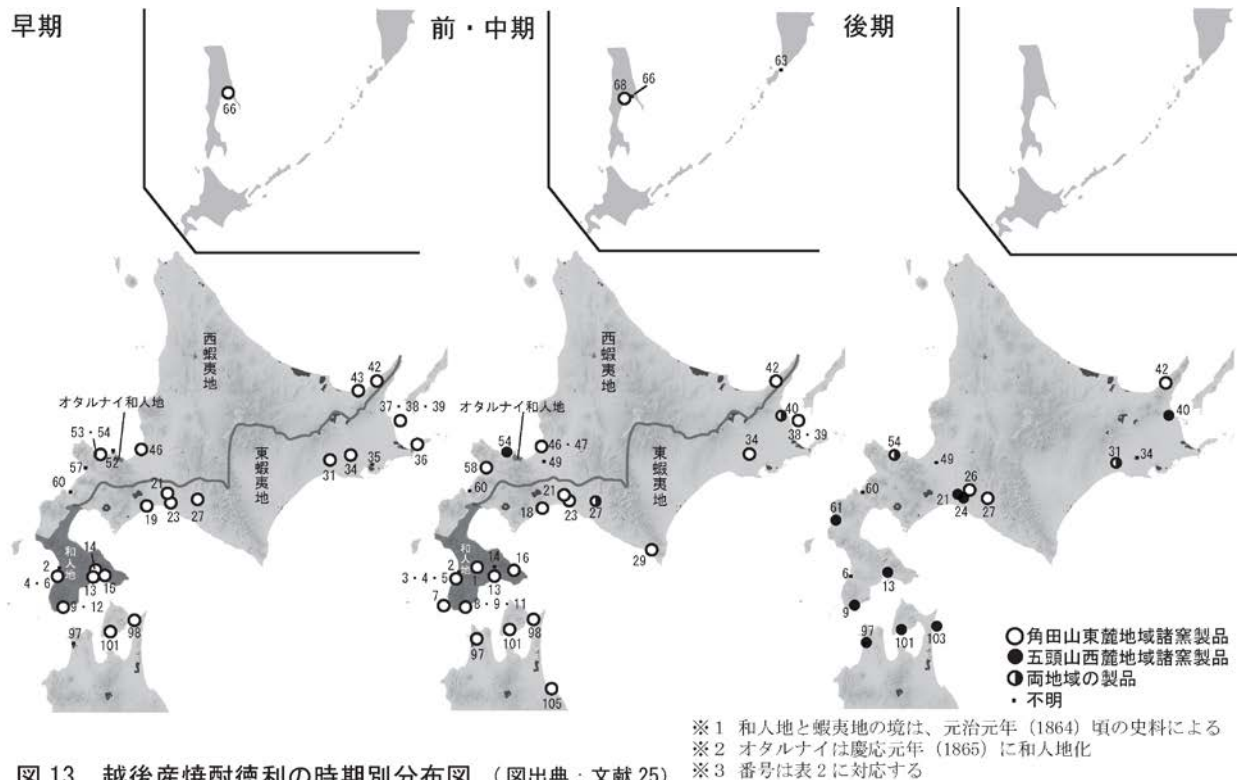


図13 越後産焼酎徳利の時期別分布図 (図出典: 文献25)

期の焼酎徳利は確認できない。サハリン島は、明治8年(1875)の樺太・千島交換条約締結以後、明治38年(1905)年のポーツマス条約により日本が南樺太を領有するまではロシア領土である。サハリン島出土・採集の焼酎徳利は1875年以前に持ち込まれたものであり、南樺太が日本領となった1905年以降、再び焼酎徳利が流入することはなかった可能性が高い。

次に、口縁部が残存している資料を基に、時期別出土量の比較を行った(図14)。その結果、早期の出土数が最も多く、全体の5割近くを占めている。これは、早期に当たる幕

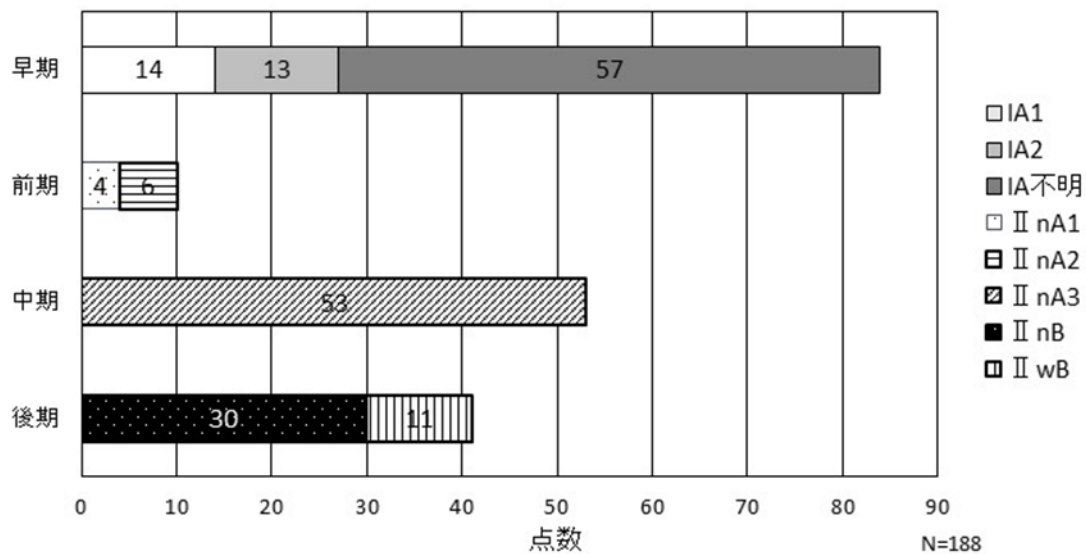


図14 越後産焼酎徳利 時期別出土量

(図出典: 文献25)

末から明治初期にかけての遺跡報告件数が、前期以降に比べてはるかに多いことが原因と考えられる。幕末から近代の遺跡の報告件数は中近世の遺跡に比べて少なく、近代遺跡になると更に報告数は減少する。また、出土事例があったとしても資料化されないことが多いため、以上のような偏りが生じたのであろう。前期から中期・後期にかけては、後期で出土数が多少減少するものの、前期と比較して4～5倍の増加が見られた。前期と中期を境としたこの出土数の増加は、この時期に焼酎徳利の流通が本格化したことを示していると言えよう。以上のことから、越後産焼酎徳利の流通は、1870年代から1910年代までの約半世紀が最盛期と考えられる。

4. 結論

近世初期に日本を訪れたヨーロッパ人の記録や出土資料から、アイヌに喫煙の風習が伝わったのは、本州に近い道南の渡島半島周辺では1630年代以前であり、道央の噴火湾周辺より東や北の地域ではそれよりやや遅れて1640～50年代に伝わり急速に広がったことが判明した。アイヌに伝世した喫煙具や出土資料からは、本州に近い道南や道央では18世紀には日本産の金属製キセルがかなり普及していたが、金属製のキセルが手に入らない場合、北海道アイヌの人々はノリウツギを素材としてニキセリと呼ばれる木製のパイプを製作しており、さらにノリウツギが自生しない道北やサハリン（樺太）、クリル（千島）のアイヌはスマキセリと呼ばれる石製のキセルを製作し、金属製キセルの代用としたことが判明する。サハリン島では樺太アイヌが住む南部の遺跡のみならず、ニブフやウイルタの居住地である中部以北からも日本製のキセルが出土しており、彼らは樺太アイヌを介して、それらを手に入っていたと考えられる。

タバコや金属製キセルは米・糶・酒とともに、蝦夷地産品の交換比率を示す際の基準品目でもあった。北海道アイヌは17世紀前半から交易やウイマムやオムシャを通して和人から金属製のキセルを手に入っていた。アイヌには広くキセル受取り渡しの儀礼がみられるように、彼らにとって喫煙は、本来極めて儀礼的な習俗であった。しかし、和人によりタバコやキセルが大量に入手しうる環境が整えられたことから、喫煙は飲酒以上に早くから儀礼的意味合いが薄れ、日常生活習慣へと変容したとみられる。日本産の金属製キセルでタバコを吸う姿は、ごく当たり前のものとしてアイヌの人々の日常生活の中に見られたのである（図15）。

アイヌ社会では儀礼用に主に稗を原料とするトノトと呼ばれる濁り酒が造られていた。対アイヌ交易品のトップは米だが、米は糶とセットで記載されていることが多いことから、和人から入手した米の多くはアイヌの人々により酒米として利用されたと考えられる。また、ウイマムやオムシャの際にアイヌへ下賜された物品や蝦夷地場所での対アイヌ交易品の古記録では、米や木綿などの衣類とならんで酒やタバコが非常に目立つ。オムシャの際にアイヌに配給される酒は、役職や年齢、功績に応じて種類や分量が細かく決められてお

り、和人が酒をアイヌ支配の道具として巧みに利用していたと考えられる。自ら酒を醸さずとも和人から大量の酒を入手しうる環境が整うにつれ、アイヌにとって酒は宗教儀礼に係る本来的な意味合いが薄れ、嗜好品へと変質したと推察される。

アイヌの人々が好み宝物視した日本製漆器は基本的に酒儀礼の道具に使われた。また彼らは伝統的に食器には陶磁器を使わなかったが、18世紀末以降、蝦夷地に渡った和人が各所に開いた漁場で働かされることにより、筆者が「幕末蝦夷地3点セット」と命名した日本産の陶磁器を使うようになった。幕末蝦夷地3点セットのうち北前船によって味噌や塩、あるいは酒や醤油を運ぶための容器として使われた上野・高取系の中甕と越後産の焼酎徳利・コンプラ瓶(図16)²⁹⁾はいずれも基本的には、蝦夷地の経済的・政治的内国化が進んだ19世紀中葉、本州から北海道に渡った和人の需要を満たすためのものであったが、同時に漁場で和人に交じって働くアイヌや安政の開港によって箱館に寄港・滞在する外国人にも受容される場所となった。安政の開国により新潟と箱館の結びつきはさらに強まり、越後酒の酒粕を原料として信濃川河口の沼垂周辺で生産された焼酎が、新潟県内で焼かれた徳利に詰められ、新潟港から蝦夷地・北海道に向け大量に移出された。日本酒に比べ安価で度数の高い新潟産の焼酎は、タバコとともに寒さの厳しい北の漁場で働く労働者やアイヌの生活に欠かせない嗜好品となった(図17)。

以上、本来アイヌの人々にとって酒もタバコも元々は宗教儀礼との結びつきが強く日常的に摂取されるものではなかったが、和人を通して大量の酒やタバコ・キセルが入手されるようになるにつれ、非日常的な儀礼上のアイテムから日常の嗜好品へと変化した。新潟・箱館の開港により蝦夷地・北

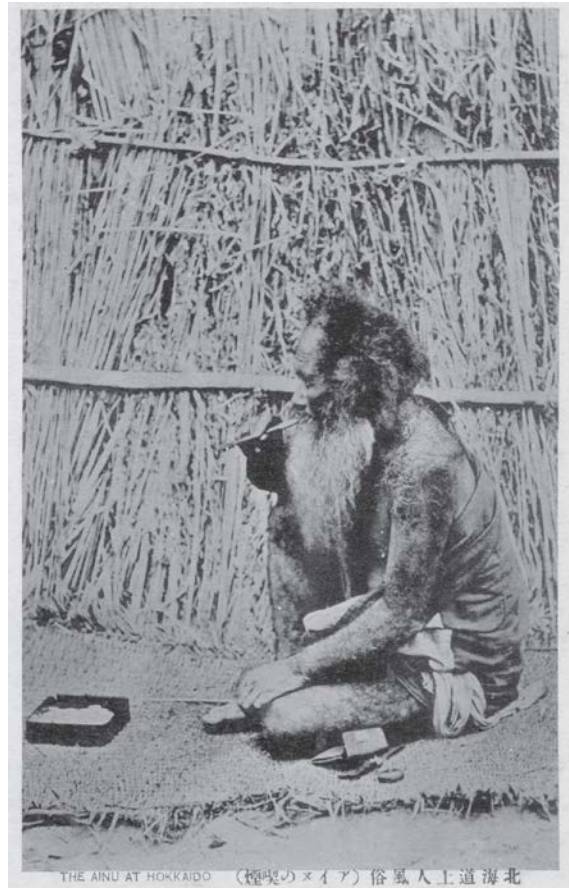


図15 金属製のキセルで喫煙するアイヌの絵葉書
(図出典：文献8)



図16 本研究で調査した松前の武家屋敷跡出土のコンプラ瓶
(筆者撮影)

海道に運ばれるようになった大量の新潟産焼酎は、同じ漁場での共同生活を通して、アイヌの人々が伝統的な生活を捨て、和人への同化を加速する役割の一端を担ったと考えられよう。



図 17 越後産焼酎徳利を前にするアイヌ長老の鶏卵紙写真
(図出典：文献 29)

5. 引用文献

- 1) 鈴木達也『喫煙伝来史の研究』、思文閣出版、1999。
- 2) 北構保男『1643年アイヌ社会探訪記』、雄山閣、1983。
- 3) 岡本良知『北方探検記 元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』、吉川弘文館、1962。
- 4) 古泉弘『江戸を掘る』、柏書房、1990。
- 5) 北海道埋蔵文化財センター『調査年報』18、2005。
北海道埋蔵文化財センター『森町森川3遺跡(2)』、2006。
- 6) 伊達市噴火湾文化研究所『有珠4遺跡発掘調査報告書』、2009。
- 7) 馬場脩「日本北端地域のアイヌとタバコ」『古代文化』13-11、1942（馬場脩『樺太・千島考古・民族誌』1、北海道出版企画センター、1979に再録）。
- 8) 関根達人『モノから見たアイヌ文化史』吉川弘文館、2016。
- 9) 関根達人 2003「アイヌ墓の副葬品」『物質文化』76、38-54頁、2003（関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易』、吉川弘文館、2014に再録）。
- 10) 山本正編『近世蝦夷地農作物年表』、北海道大学図書刊行会、1996。
松前地（和人地）では享保2年(1717)には煙草が栽培されており（「松前蝦夷記」）、蝦夷地でも19世紀初頭には道央太平洋沿岸のムカワ（鶴川）でアイヌによる煙草の栽培が確認できる（「東蝦夷地紀行」）。
- 11) 松前町史編集委員会『松前町史』資料編3、1979。
- 12) 蝦夷地場所での対アイヌ交易品の古記録としては、ヨイチ場所の場所請負人である林家（竹屋）文書（『余市町史』資料編1、1995）や、シベツ場所の支配人であった加賀伝蔵が遺した加賀家文書（秋葉實『北方史資料集成』2、北海道出版企画センター、1989、別海町郷土資料館『加賀家文書』、1989、同『加賀家文書』2015等）が参考になる。
- 13) 余市町教育委員会『入舟遺跡における考古学的調査』、1999。
- 14) 斎藤正一「大山酒造業発達史—東北米作地帯における酒造業の一例—」『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』1、33-55頁、1967。
- 15) 関根達人「アイヌ文化と大山酒—北海道余市町入舟遺跡出土の酒樽の歴史的意義—」『斬新考古』4、4-6頁、2016。

- 16) 文献 14 に同じ。
- 17) 大山町酒造組合『大山酒史』、1916。
- 18) 「文久元酉年十月戌年御仕入物注文帳」（別海町郷土資料館『加賀家文書 2』、2015）
- 19) 北野信彦「アイヌ社会の漆器考古学が意味するもの」『考古学ジャーナル』489、4-6 頁、
ニューサイエンス社、2002。
- 20) 関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易』、吉川弘文館、2014。
- 21) 関根達人・佐藤雄生「出土陶磁器からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』28、69-87
頁、2009。
- 22) 石黒半月『笹岡村誌』、1913。
- 23) 松下亘「北海道に現存している異色徳利について—容器文化史の一断面—」『物質文化』
30、10-23 頁、1978。
松下亘・氏家等・笹木義友「焼酎徳利について—明治期における新潟と北海道との関連
資料—」『北海道開拓記念館研究年報』6、47-63 頁、1978。
- 24) 関根達人「北日本（北海道・青森県・岩手県域）における江戸時代後期の陶磁器の流通」
『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）』第 19 回九
州近世陶磁学会資料、314-454 頁、2009。
- 25) 関根達人・木戸奈央子「越後産焼酎徳利（「松前徳利」）の生産と流通」『中近世陶磁器
の考古学』8、163-184 頁、雄山閣、2018。
- 26) 巻町郷土資料館編『松郷屋焼館蔵品目録』巻町郷土資料目録 5、1983。
- 27) 笹神村編『笹神村史』、2004。
- 28) 文献 26 に同じ。
- 29) 関根達人「安政の開港と出土陶磁器—なぜコンプラ瓶は北海道から出土するのか—」『中
近世陶磁器の考古学』4、雄山閣、163-184 頁、2016。

6. 英文アブストラクト

The Infiltration of Ezochi by Japanese as Indicated
by Sake and Tobacco at the Edo Period

Tatsuhito SEKINE

(Hirosaki University Faculty of Humanities & Social Sciences)

Sake and tobacco were main trade products with Ezo for Japan as well as rice and cotton clothing. They were imperial grant products in case of the ceremony for courtesy with the tribute paid to the court called uimamu or services event for Ainu people called omusha. Wajin who were major people in Japan used sake and tobacco as a tool

to rule over Ainu people skillfully. Sake and tobacco were ceremonious items for Ainu first. After the 18th century, a large quantity of sake, tobacco, and long pipes came to flow into the Ainu society, and sake and tobacco changed from items for courtesy into luxury goods. By the opening of Japan in the last days of the Tokugawa shogunate, Hakodate and Niigata became the international trade port. A large quantity of shochu made from sake lees from 1870s through 1910s was exported for Hakodate Port from the Niigata Port. Shochu made in Niigata prefecture which was cheaper than sake and had high frequency, was the luxury goods for Japanese worker and Ainu who worked in severe north fishing grounds of the cold.